

「舐めやがってこいつら、これからたっぷりとブチ犯してやるからな」

最初ステイブが何を言っているのかわからなかった。

「は？」

「ああ、そうだな！すげえたまってたんだ！俺はその青いの使わせてもらうぜ！」

いやちよつと待て！

なにを言っているんだこいつらは。

「おいおい、変な冗談はよせよ」

そう口に出した瞬間、思い出した。

異星人性交渉実験記録で説明されていたこと。


『エイリアンX-01の体臭には媚薬のような効果があり、舌を口に挿入されるとさらに強力に作用する』

しまった！！

そういうことか！！

「まで！ みんなっ・・・。」  
「よし、とりあえずどっかの空き部屋にこ  
いつら括り付けようぜ」  
「そうだな！」

私は、さっきまで何に違和感を抱いていた  
のか、忘れてしまった。  
しかし、よくあることだ。忘れてしまうよ  
うなことは、たいして重要なことではない。  
とにかく今は、早くあのエイリアンとセツ  
クスがしたいんだ。




白いエイリアンを立った状態で足を大きく開かせ拘束した。少し開いた陰唇から透明のスライムのような粘った液体が滴っている。

「なんてヤツだ」

ア~~~~

強制的に襲われている立場なのにもかかわらず、淫靡な匂いを発しながらエイリアンの膣は俺に肉棒を挿入されることを待ちわびているようだ。



こうなるとじらしたくなるのが男の心情ではあるところだが、こちらももう我慢の限界になっている。

膣口に先端を押し付けてみる。

ぐざり

ぐちゆりと音をたて、陰唇部分がペニスに触れた瞬間、陰唇の温度や厚み、かすかな痙攣を感じすべてを悟った。

これから、今まで味わったことのない恐ろしいほどの快感が待ち受けているということを。

覚悟を決めて一気に挿入した。

その瞬間訪れた期待通りの、期待以上の過  
去最高の快感。

ぬちゅる

ビクッ

例えるならローションにまみれた熱く柔らかい指。そんなものが何十本も独立して蠢き、しがみついてくるような感じ。

むぎゅ♡

グニゅ

むぎゅ♡

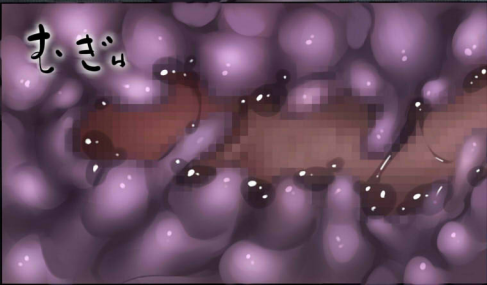


ズキ

又キ

自分の快感で脳が占領され、気づかなかつたが、エイリアンの方も身を振り、快楽の喘ぎ声を漏らしていた。

「化け物めっ」



ペニスに感じるミクロな快感だけでなく、  
異星人と性行為をしているというこの状況  
を思うだけで射精しそうになる

はん

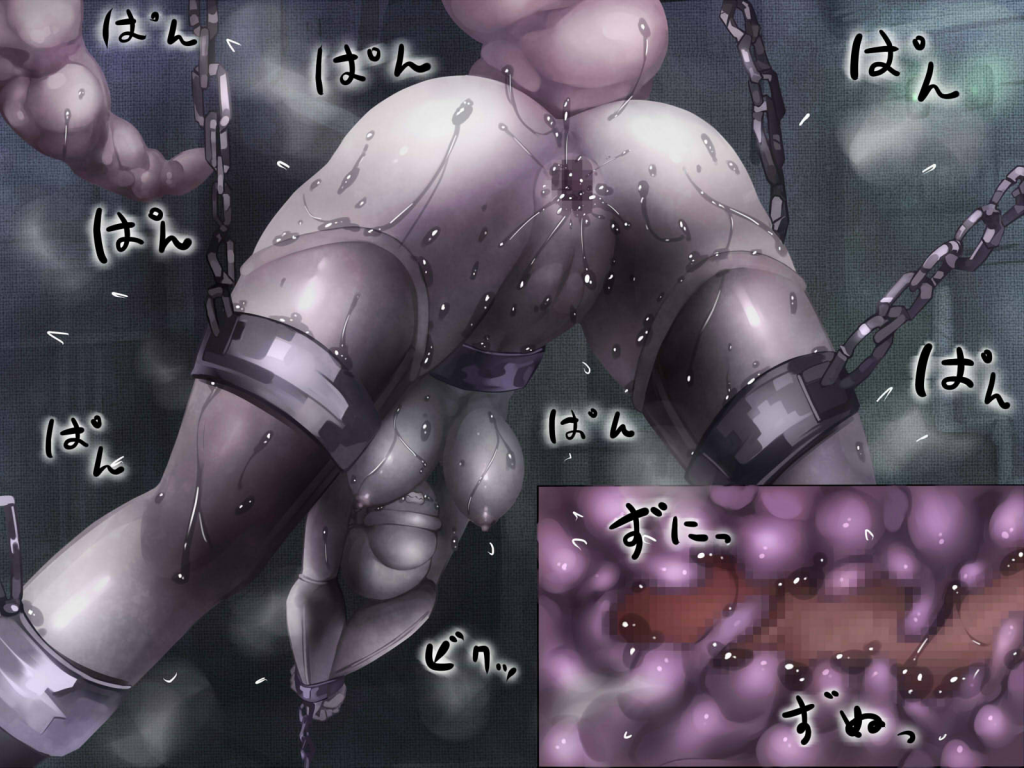
はん

フケル

プル

その後一切の思考を捨て。ひたすらに腰を  
打ち付けた。

ズチ



はん

はん

はん

はん

はん

はん

はん

ぐに...



ぐに...

すね...



「見るよあいつ、白目向いて涎垂らしてるぜっ」  
「そんなにいいのか。早く俺もしてえ」  
遠くから声が聞こえる。  
だんだんと思考がクリアになっていく、魂が肉体に帰ってくる。

はん

ばん

ばん

ばん

ばん

ばん

だめだ。意識が戻るとすぐにイッてしまう。  
まだこの快感を味わい続けたいのに。

だが、気づいたところにはもう遅い、耐えが  
たい快樂に脳が射精の命令を下した。

ドグッ

ぼび

「うおおおおおー!」

再び頭が真っ白になる。



グッ

足腰が立たなくなり、その場にへたり込んでしまった。

ゴホッ

ト

そしてこれから続くであろうエイリアンたちへの凌辱行為、それを思うと笑みがこぼれてきた。